

## 10) ヤナギラン=柳蘭

ヤナギランはアカバナ科の多年草で、北半球の温帯から寒帯にかけての各地に広く分布し、そのエリアは北極を中心としてドーナツ状に広がっている。このような分布形体を専門的には『**周極分布**』と呼んでおり、ヒメワタスゲやモウセンゴケなどもこの分布様式を示している。寒冷な気候を好み、氷河期には南下して南への分布を広げ、間氷期には取り残されてその地に止まったものである。高山植物といわれているものにはこの類が多く、気温が低い高山に取り残されたわけである。ヤナギランは日本では主に本州の中部地方から北海道の山野に広く分布し群生することが多い。茎は高さ 1.5m ほどになって分枝せずに直立し、ヤナギに似た葉は互生する。葉縁には鋸歯があり、裏面はやや白色をおびる。夏から秋にかけて茎頂に長さが 10~30cm ほどの**総状花序**を出して、紅紫色の 4 弁花を横向きに多数つける。花冠は径 2~3cm で雄蕊、雌蕊はともに下向きに曲がっている。和名の由来は葉がヤナギの葉に似て、美しい花を咲かせるために名付けられたもので、ヤナギソウともいう。山梨県の芦安村では夏中咲き続けるところから百日草とも呼んでいる。果実は細長いインゲンマメのような形をしており、完熟すると弾けて中から綿毛のついた種子を飛ばす。種子は風に乗って遠くまで運ばれるようになっている。また地下茎が伸びて繁殖するため、繁殖力は極めて旺盛である。アイヌはこの花をこよなく愛し、『キナポアハニ』と呼んでおり、これは『草・子宮・木』のことである。学名は『*Epilobium angustifolium*』で、属名の「epi」は梢のことを「ion」はスマレを、「lobin」は上を意味しており、スマレのような花が長い梢の上に咲くため、種小辞は「細葉の」という意味である。イギリスでの呼称は『rose bay』『willow herb』『fireweed』『wicopy』などさまざまである。因みに『bay』は月桂樹、『willow』は柳、『herb』は薬草、『weed』は雑草のことを意味している。またフランスでは『épilobe』、中国では『柳蘭』である。

ヤナギランは花が美しいために海外でも人気は高く、特に山火事や伐採後の陽だまりにいち早く侵入して大群落をつくることも多い。イギリスで『fireweed』（ファイヤ・ウィード）と呼ばれて親しまれているのもこのためである。日本ではこのような山火事や伐採跡を占拠する植物は決まってススキである。

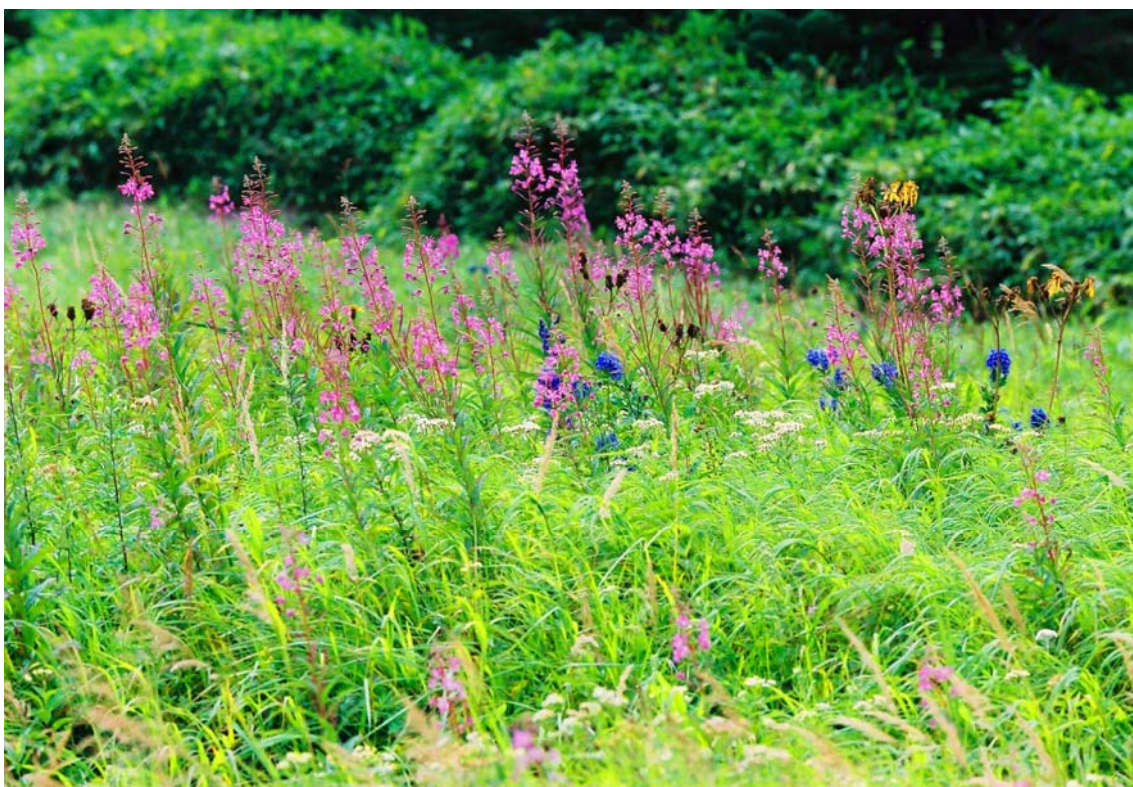
ヤナギランは陽当たりのよい中部以北の高原地帯には特に多く、夏休みも終わりに近づく頃、みごとなお花畑を作る。特にやや湿り気が多い草原地帯や、冬はスキー場になるような斜面を埋め尽くすように咲き競う姿は壮観で、ハイカーにとっては馴染深い花の一つである。また鑑賞用として栽培されることもしばしばで、中には白い花を咲かせるものや、八重咲のものもある。花は下から上に咲きあがり、蜜を多く分泌するため蜜源植物としても重要で、夏眠から覚めた蝶類がよく集まってくる。若葉は食用にもなり、ロシアではお茶がわりに飲用されることもあるという。このために最近では鹿による食害も進み、安閑としてはいられなくなってきた。



ヤナギラン、下部には種子ができており、上部にはツボミが残る(長野県蓼科高原)。



ヤナギランは、しばしば群生することがある。北半球の寒帯から温帯にかけてドーナツ状に、ちょうど北極を取り囲むように分布する(長野県松本市乗鞍山麓)。



ヤナギランと青い花はトリカブトである(長野県麦草峠)。

[目次に戻る](#)